

## 国境をこえて

香港日本人学校中学部 2年  
村瀬 広高 (むらせ ひろたか)

ぼくは、今まで四つの外国に暮らし、いろいろな国の人たちの中で育ってきた。

まず、タイで生まれて、タイ人のメイドさんやドライバーさんに、いつも遊んでもらっていたらしい。一才になると、週一回の体操教室にも通い、タイ人の友達もいたそうだ。

次に、シンガポールでは、初めてナサリースクール（保育園）に通い、いろいろな国の友達と知り合った。プレイルームにある滑り台を滑る順番争いで、いつも勝つのは体の大きい金髪の友達だった。

一回目の香港生活では、英語の幼稚園に通った。その時のぼくの一番の友達はカナダ人だった。彼とはよくベイブレードをして遊んだが、父が日本の出張で買ってきてくれた独楽や剣玉をして遊ぶこともあった。

それからインドでは、日本人学校に通ったが、夏休みには、毎年アメリカンスクールのサマースクールに参加したし、日本人のいない現地のテニススクールにも入り二年間通った。また、インドの現地幼稚園に通っていた妹のベストフレンドはコンゴ人で、その兄弟もぼくの友達だった。

そして、三年間の日本生活を経て、今また香港に戻ってきた。

このように、ぼくは、いろいろな国で、いろいろな国の人たちのお世話になり、いろいろな国の友達と遊んで育った。肌が真っ黒な友達も、ゲームの話をすればすぐに仲良くなれたし、髪が金色の友達も、ポケモンの話をすれば気が合った。ぼくは、小さい頃から英語はうまくしゃべれなかったけれども、ジェスチャーをつけたでたらめ英語でも十分に話は通じた。だから、いろいろな国の人たちの中で、ぼくが日本人だからといって、差別されたり嫌な思いをしたりしたことはないし、ぼくも、肌の色が違うからとか言葉が通じないからという理由で、違う人間だと思ったことはない。そう、ぼくは外国人を差別したことはない。

しかし、本当にぼくは、外国人を差別したことがないのだろうか。外国人を差別した発言を一度もしたことがないかと考えると自信がない。

例えば、香港人には赤信号でも平気で渡る人がたくさんいる。それを見て、ぼくは、

「香港人はしょうがないな。」

と思う。でもよく見ると、香港人全員が信号無視をしているわけではない。また、世界には、今でも戦争をしている国がいくつもある。

「人を傷つけ合うなんて馬鹿げている。」

とぼくは悲しくなる。でも、それも好きで戦っている人がいるとも思えない。その人たちがそうなったのには、何かきっと原因があるはずだ。

逆に、外国人から見ると、日本人はどのように思われているのだろうか。

インドから日本に帰国した時、毎日ごみがたくさん出ることに、ぼくはとても驚いた。インドの人たちがよく使う道端にあるカレー屋さんでは、バナナの葉で作ったお皿にカレーを入れてくれる。食べた後、そのお皿を道に捨てると、のら牛がその葉っぱを食べる。そして、牛のふんは燃料になるという。それに比べて、日本は、ちょっと歩くとペットボトルの飲み物が買え、ファーストフードのお店では使い捨ての食器を使い、立派なお菓子の箱を開けると中身が少なくてがっかりすることもある。ある時、母が捨てたジャムの空きびんを、メイドさんとエアコンの修理にきていたワーカーさんとが取り合って、けんかをしていたこともあった。それを見て、ぼくはあきれてしまったが、逆にインド人から見ると、使い捨て文化のしみついた日本人はとんでもない人間に見えるのかもしれない。国によって考え方や行動パターンが違うのは、歴史的背景や宗教、習慣、気候などのいろいろなことが関わっているのだと思う。

このように考えると、差別とは、その人の一部しか見ていないことや、自分のやり方だけが正しいと思うことからおきるのではないかと思う。その人が自分とは違った行動をとったとしても、それには深い理由があるのだろうと考えれば、きっと納得できると思う。ぼくも、これからは否定的な発言をする前に、その人たちのことをいろいろな角度から見て理解する努力をしてみようと思う。外国との間には、自分の国とは違う言葉や文化という壁があるとみんな言うが、そこにあるのは、壁ではなく橋だとぼくは思う。理解し合おうという気持ちがあれば、きっと誰でもその橋を渡っていけるはずだ。気持ちの国境をこえるのにパスポートはいらない。お互いを理解し合おうと思う気持ちが一番大切だと思う。そして、ぼくは、これから日本人として生きるのではなく、地球人として生きていこうと思う。